

福岡女学院大学紀要 人文学部編 第31号
2021年3月

「リュキアの古道」トレッキング観光を通じた遺産化

—トルコ地中海地方デムレにおける「デムレ・ケコヴァ・
アウトドアと地元の食文化フェスティバル」の事例から—

田中英資

「リュキアの古道」トレッキング観光を通じた遺産化

—トルコ地中海地方デムレにおける「デムレ・ケコヴァ・
アウトドアと地元の食文化フェスティバル」の事例から—

田 中 英 資

はじめに

トルコ地中海地方アンタルヤ (*Antalya*) 県西部を占めるテケ (*Teke*) 半島の沿岸部は、「トルコのリヴィエラ」とも呼ばれ、トルコでも有数の保養地として知られている (図表1)。また、ローマ帝国の時代までこの地域はリュキア (*Lycia*) と呼ばれ、西洋古典の文献にも頻繁に登場する。そのため、家の形をした石棺をむき出しにした墓や岩窟墓で知られる古代リュキア文化はヨーロッパの人びとの関心を引いてきた。こうしたリュキア時代からローマ帝国時代にかけての古代都市の遺跡、ビザンツ帝国時代の教会や修道院の廃墟など、この地域には、先史時代から続くその長い歴史を物語る遺跡が数多く残っている。ただし、UNESCO 世界遺産に登録されているクサントス遺跡 (*Xanthos*) やレトゥーン遺跡 (*Letöon*)、2020年を「パターラ年」として、トルコ政府による史跡整備や観光促進が進められたパターラ遺跡 (*Patara*) など、発掘調査や史跡整備が進み、観光地化している遺跡はごく一部にすぎない (参考 T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı, 2020)。多くの遺跡では発掘調査や史跡整備がほとんど行われておらず、うち捨てられた状態である。

また、この地域で盛んに行われてきた観光のあり方は、地中海の「青い海」

を資源としたビーチリゾートやボートツアーである。特に、テケ半島の海岸線をめぐるボートツアーは、1980年代から人気の観光コンテンツとなっている。これに加えて、欧米を中心とした外国人観光客やトルコ中上流層の観光客の間で近年注目を集めるようになった観光のあり方に、「リュキアの古道」と名づけられたルートを歩くトレッキング観光がある。これは、観光地化した遺跡だけでなく、主として山間部に点在する未発掘の廃墟化した遺跡を、古代の道、現在では使われなくなった移牧用の道で結んだものである。このルートを行けば、この地域の長い歴史を示す様々な遺跡だけでなく、ルート沿いの村々に暮らす人びとの生活にも触れることができるのが観光の魅力とされている（Culture Routes Society, 2019）。2000年代以降、このトレッキングルートを行く人が増えてくるにつれ、ルート上の観光産業に従事する人びとだけでなく、自治体もこのルートを活用した地域振興を進めるようになってきている。このトレッキング観光のあり方に注目が集まることを通して、史跡整備された遺跡だけでなく、未発掘の遺跡や、村々に残る伝統的な

図表 1：トルコ西部地図



生活様式が観光資源として見直されることにつながっている。

近年、遺産を保護や保全といったかたちで客体化された対象としてみるだけでなく、遺産という価値をめぐる意味や知識がいかに関築されていく「遺産化 (heritagization)」のプロセスについての研究が注目されている (Harrison, 2013; 木村・森久, 2020; Smith, 2006 etc.)。本稿では、こうした「リュキアの古道」トレッキング観光がいかに関観光資源としての「遺産」を生み出しているのかについて検討する。まず、近年の遺産化に関する先行研究を整理したうえで、「リュキアの古道」トレッキング観光の状況を捉える。特に、「リュキアの古道」を通じた地域振興の取り組み事例として「デムレ・ケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル」に焦点を当て、どのような形で遺産化が進行しているのかをみていく。このイベントの分析から、どのような形で「遺産」が意識されているのかを検討する。

過程としての「遺産」と観光

「遺産 (heritage)」とは、一言でいえば、過去・歴史に焦点を当てる形である対象に付与される価値である。ただし、その「遺産」とされた対象にどのような価値を見出すかは、遺産をめぐる行為者の立場などによって異なり、当事者間には様々な権力関係も生じている。したがって、遺産とは、例えば過去の歴史を顕彰するものでそれを将来にわたって受け継いでいくための保護の対象といった形で客体化された何かというだけでなく、そのようにみなされた有形・無形の文化と、それをめぐる利害集団の交渉という社会的な過程として考えることができる。近年の遺産研究では、このように遺産を特定の事物、場所というより過程として捉え、そのような遺産をめぐる価値や意味の政治性、知識の構築プロセスを「遺産化」と呼んで、遺産とされた事物や場所などと、それに利害を持つさまざまな集団の間関係性を捉える動きが主流となっている。

英国の考古学者ケヴィン・ウォルシュは (Walsh, 1992) は、それがどう

いう機能であれ、一定の機能を持つ事物や場所が展示や陳列の対象となっていく過程を「遺産化」と呼んだ。廃墟のように役に立たないものも、人びとの鑑賞の対象となることで、「遺産」という価値が生まれる（木村，2020：4-5）。また、この「遺産化」という過程をミシェル・フーコーの「言説」概念から捉えようとしたのが、オーストラリアの考古学者ローラジェイン・スミスである。スミスは、遺産とは「ある社会的、文化的価値の創出と維持に関する社会的過程」（Smith, 2006：42）であると論じる。そして、この過程としての遺産に大きな影響力をもつのが、「遺産とされるものに正しい定義を与え、その定義にもとづく遺産の性質や意味について誰が語る能力があるかを定める」支配的な言説であると指摘した（Smith, 2006：29）。スミスはこれを「権威づけられた遺産言説（Authorized Heritage Discourse, 以下, AHD）」（Smith, 2006）と名付け、遺産とは、「遺産」とされたものをめぐる利害集団間の権力関係のなかで、そうした利害集団の間でAHDを受容していくように仕向けていると主張している。スミスの議論は、考古学や歴史学、人類学を含めた西洋的な専門知がAHDとして作用しながら遺産の価値を成り立たせてきたことの批判にもつながっている。「過去のスポークスマン」としてのこれらの専門知が、それ以外のアプローチを周縁化しながら、「遺産」とは何かを左右する前提、すなわちAHDとして再生産されてきたことを示したのである。

遺産化に関わる言説分析を中心とした遺産研究に対して、遺産とされたモノの物質的な役割の重要性も指摘されるようになってきている（木村，2020：9）。英国の考古学者ロドニー・ハリソンは、人やモノ、概念の関係性をネットワークとして捉えるアクター・ネットワーク理論（Actor-Network Theory, ANT）を導入し、言説研究に加えて遺産とされたモノの物質性も考慮したより総合的なアプローチを提唱している（Harrison, 2013；Latour, 2005）。遺産とは地域住民、行政、専門家、観光者といった人間集団、「遺産」とされた事物・場所そのものや、訪問者向けの説明装置、遺産保護に関する法令等の人間・非人間のアクター間の関係性から生み出さ

れる。ハリソンは、こうした人間・非人間アクター間の関係性を「対話的(dialogical)」と特徴づけている (Harrison, 2013)。

遺産を「過程」として捉えた場合、その過程に密接に関わっている要素の一つが観光である。「遺産」とされた事物・場所に「観光のまなざし」(Urry & Larsen, 2011) が向けられることを通して、「遺産」とされたものは商品化され、観光の「目的地 (destination)」(Kirshenblatt-Gimblett, 1998) となる。こうして「目的地」化された遺産は金銭的価値に換算されて「消費」の対象になるのであるが、ここの注目すべきは、それローカルな歴史の蓄積を具現化したものとしての遺産は、容易に他所で真似することができないという点である (木村, 2020: 64)。これは、そこにある遺産を比較のお金をかけずに観光資源として活用できるということを意味する。日本においても観光も含めたまちづくりの核として遺産を活用することも念頭に文化財保護法が改正されたが、遺産を活かした都市計画、都市政策がグローバルな規模で進んでいるのは、このことも背景にあるといえよう (木村, 2020: 64)。

さらに、遺産が消費の対象として観光のまなざしを受けることとも密接に関係して、パフォーマンスの観点から遺産化と観光の関わりを考える研究も進んでいる。ここでいうパフォーマンスとは、人びとの振る舞いと遺産の場という物質的環境が交差する実践である。遺産の場における過去の再現、遺産の場での観光者の行動のあり方や遺産に対する解釈・理解の仕方だけでなく、訪問の記念として土産物を購入し、自宅に持ち帰ることや、写真や動画の撮影と SNS などへの発信といった行為なども含まれ、幅広く捉えられている (Haldrup and Bærenholdt, 2015)。遺産化のパフォーマティブな側面への注目は、遺産をめぐるさまざまなパフォーマンスが、言説や表象と絡み合いつつ、人間・非人間のアクター間の複雑的な関係性のなかで生み出されることを示そうとするものである。これは、近年の観光研究において、上述の ANT を用いて観光の場における人とモノの交流を通じたネットワークの生成過程に注目する研究が進んでいることともつながる (橋本, 2018)。

これら先行研究の議論をふまえると、観光の文脈における遺産化の過程を

明らかにするには、人間・非人間の双方的で多様な関係性のなかでどのように対象が遺産とみなされていくのかをみていく必要がある。本稿ではトルコ地中海地方の「リュキアの古道」トレッキング観光を事例に、「リュキアの古道」が遺産化の過程においてどのような役割を果たしているのかを検討する。

テケ半島における観光産業の発展と「リュキアの古道」トレッキング観光

テケ半島では、険しい山々が海岸線までせり出す地形が続いている。そのため、20世紀半ばまで海岸部に点在する漁村に暮らす人びとは漁港から漁港へボートで移動していたという (Clow, 2014 : 11)。山間部では、山羊や羊の移牧がイスラーム化以前から盛んに行われていた。移牧とは、夏は冷涼な高地で、冬は温暖な低地で家畜を飼育する牧畜のあり方で、イベリア半島からアナトリアにかけての地中海各地域で行われ、数千年に及ぶ非常に長い歴史があると考えられている (参考 谷, 1996 [1976] : 12)。そのため、移牧はアナトリアのみならず、地中海地域における「伝統」的な生業の一つとして捉えられてきた。

トルコでは、移牧に従事する人びとのことはヨリュク (*yörük*) と呼ばれる¹。テケ半島一帯を含めた地中海地域は、ヨリュクが多かった地域である (松原, 2004 [1998])²。また、テケ半島の「テケ (*teke*)」とは、14世紀前半から15世紀前半にかけてアンタルヤを拠点にこの地域を支配したテケ君侯国に由来するが、「テケ」という名前自体「雄山羊」を意味するトルコ語からきているという。テケ半島一帯では伝統的に山羊の牧畜が盛んに行われて

¹ 文化人類学者の松原正毅は、“*yörük*”を「ユルック」と表記しているが、現地の発音に近い表記は「ヨリュク」であると筆者は考えるため、本稿では「ヨリュク」と表記する。また、松原はヨリュクのことを「遊牧民」と呼んでいるが、ヨリュクたちの牧畜は季節ごとに定まった移動先があり、そこに家畜を移動させていく生活様式であるため、本稿では「移牧」と呼ぶ。

² 松原は、1970年代末から80年代初頭にかけてアンタルヤ北東部で移牧生活を送っていたヨリュクたちの民族誌的調査を行っている。

図表2 テケ半島山間部の村で飼育されている山羊



いた。ただし、現在この地域で行われている牧畜は、定住型の牧畜が中心となっており、移牧を行うヨリユクの数も、非常に少なくなっている。これは20世紀後半から大多数のヨリユクたちが移牧をやめて定住化した結果である。

1960年代以降、ヨリユクたちの暮らしは大きく変容した。トルコ政府が彼らの定住化政策を積極的に進めたこともあり、彼らの多くは、農村部や都市に移り住むようになっていった(松原, 2004 [1998]: 389)。農村部に定住したヨリユクたちは、当時導入が進められていたビニールハウス農業に従事するようになった。それと並行して、農産物の輸送などを目的に、テケ半島の海岸線を縦貫する幹線道路の整備も進められていった(Adalet, 2018: 129)。アンタルヤからフェティエ (*Fethiye*) までテケ半島の沿岸部を縦貫する幹線道路が完成するのは、1989年である(Clouw, 2014: 11)。効率的な農業生産を可能にしたビニールハウス農業は、現在でもこの地域で拡大を続けている。また、移牧は行われなくなったにせよ、高地と低地に住居を持ち、夏は涼やかな高地の家で暮らし、冬は寒さが比較的穏やかな海岸部で暮ら

すという生活様式を維持している人も、引退した高齢者を中心として目立つ。

テケ半島沿岸部の道路網の整備が進んだ結果として発展したのが観光産業である。幹線道路の整備によりテケ半島海岸部に点在する漁村や町が結ばれていったことで、地中海の「青い海」に目を付けた人びとが保養に訪れるようになった。結果として、都市部のトルコ人たち向けの別荘地や観光保養地の開発も急速に進んだのである。「はじめに」でも述べたように、1980年代以降はテケ半島海岸部をめぐるボートツアーが盛んに行われるようになるなかで、小さな漁港に過ぎなかったフェティエやカシュ (Kaş) がこうしたボートツアーの拠点として発展したほか、観光開発の中心となった海岸沿いでは、海の見える斜面に別荘が張り付くように建てられていった (図表3)。観光開発の動きが進むなかで、農業を始めたかつてのヨリュクの人びとは、トルコの都市部だけでなく、発展するこの地域の観光産業にも農産物を出荷するようになっていった。また、ホテルやゲストハウス、レストラン、土産物屋の経営など、観光産業に従事するようになった者も多い。

図表3 ポートツアーの拠点として発展した港町カシュ



観光資源という観点でこの地域をみると、上述の通り、地中海の「青い海」は観光産業の中核となってきた。また、欧米諸国の観光客から注がれてきた古代リュキアの遺跡に対する観光のまなざしも、観光産業の発展に重要な役割を果たしてきたといえる。こうした従来の観光資源のなかでも、過去の歴史への観光のまなざしを山岳地帯に残る現在では使われなくなった道に結びつけ、この地域の観光に近年変化をもたらしているのが「リュキアの古道」である。

「リュキアの古道」は、史跡整備が進み、観光地となっている古代リュキアの都市遺跡やビーチ、未発掘の都市遺跡や廃墟化したビザンツ時代の修道院跡、見晴らしのよい場所などのポイントを、うち捨てられた古代の道や、現在ではほとんど使われていないヨリュクたちの移牧用の山道でつないで設定された総距離540キロに及ぶトレッキングルートである。つまり、「リュキアの古道」とは、古代から残る街道や巡礼路のような歴史的な道ではなく、現代の道といえる。

このルートを開拓したのは、トルコ在住の英国人女性ケイト・クロウ氏である。1980年代末にトルコに移住したクロウ氏は、1990年代後半から約4年の歳月をかけてテケ半島山間部を自ら歩いてこのトレッキングルートを完成させた。そして、テケ半島の古代名である「リュキア」にちなみ、「リュキアの古道」と名づけた。

なお、「リュキアの古道」は、英語では“Lycian Way”となり、トルコ語では“*Likya Yolu*”となる。英語の“way”もトルコ語の“yol”も、単に「道」を意味する単語であり、「古い」というニュアンスは特にはない。にもかかわらず、ここで敢えて「古道」という訳にしたのは、このルートを開拓したクロウ氏がアマチュア歴史家を自称するほどにこの地域の歴史文化に関心をもっており、テケ半島の山間部に残る古代の道、現在は使われなくなった道をつなぎ、テケ半島の歴史をテーマにした一つのルートを作ることにこだわっていた点を表現するためである。

クロウ氏にインタビューした際³、彼女は、現在は使われなくなったロー

マ時代の道や、ヨリュクの人びとがかつて家畜を移動させるために使っていた道を積極的に選んでいったと話した。そうやって選んだ道で、宿泊場所となる村々やキャンプに適した場所、観光地化した遺跡や山間部に残る未発掘の遺跡やビザンツ時代の教会・修道院の廃墟、景色の良い場所など、見どころを結んでルートを設定していったという。

「リュキアの古道」完成後の数年間は、クロウ氏が一人でルートの管理をしていたが、「リュキアの古道」を歩く人が増えてくると、ルート上にある町や村の宿泊・飲食業者やトレッキングツアーの手配を行う旅行会社などが彼女に協力し始めた。また、クロウ氏は、トルコ政府や大手企業からの支援を取りつけ、ルート上の要所に案内板が立てられるようになった（図表4）。ルートの歩き方や見どころの情報をまとめた地図付きのガイドブックを出版しており、その後のルートの修正や追加を反映した改訂を重ねている（参考 Clow, 2014）⁴。また、GPS 機能をつかったスマートフォンアプリも開発し、配信している。このスマートフォンアプリでは、ルートマップ上で自分の位置を確認できるほか、ルート上の見どころや村の宿泊施設、キャンプに適した場所などの情報をまとめたものである。最新版は、英語、トルコ語、ロシア語と、多言語にも対応したものになっている。

トルコ国内外における「リュキアの古道」の認知度は上がっている。例えば、Instagram では、2020年1月現在で #lycianway や #likyayolu といったハッシュタグをタグ付けした投稿がそれぞれ数万件ヒットする。また、CRS のガイドブックとは別に、「リュキアの古道」のガイドがこのルートについての独自のガイドブックを出版しているほか、「リュキアの古道」を歩くトルコ人女性を主人公にした小説も出版されている（Tüzün, 2019; Bingham, 2013）。

³ クロウ氏に対するインタビューは、2015年8月から継続的に行っている。クロウ氏に対しては、「リュキアの古道」のほか、CRS の活動内容などについて聞き取りを行ってきた。

⁴ 2014年刊行の「リュキアの古道」ガイドブックが第4版である。なお、最新のルート情報はスマートフォンアプリで確認できるようになっている。

図表 4 トルコ政府や大手銀行の支援を得て設置された案内板



「リュキアの古道」の設定後も、クロウ氏はトルコ各地を歩いて「聖パウロの道」などのトレッキングルートを設定してきた。また、「リュキアの古道」に倣った形で、主として歴史文化をテーマにしたトレッキングルートの設定もトルコ各地で行われるようになり、クロウ氏はそうした動きに協力するようになった。さらに2012年には、自らの活動の支援者や協力者とともに「リュキアの古道」などそれまでにトルコ国内に設定されたトレッキングルートの管理や、さらなるトレッキングルートの設定などを目的としたNGO「文化ルート協会（英語：Culture Routes Society, トルコ語：Kültür Rotaları Derneği, 以下、CRS）」を設立し、その代表となった。現在では、ルートの管理や活用に関わるトルコ政府やルート上の自治体との交渉、国内外の財団からの助成金はCRSを通して行われている。

「リュキアの古道」のトレッキングのシーズンは、春と秋である。ガイドに連れられて歩くガイドツアーや、ツアー会社に空港から出発地点・ゴール地点まで送迎と、途中の宿の予約をしてもらっただけのセルフガイドツアーの

形で歩いている人が多い。ガイドツアーやセルフガイドツアーの場合、大きな荷物は宿から宿へ配送するサービスが付いているため、比較的軽装備で歩けるメリットがある。逆に、すべての手配を個人で行い、必要に応じてテントを張り野宿しながら歩いていくトレッキング客もいる（図表5）。なお、「リュキアの古道」は、公式には西側のフェティエ近郊がスタート地点で、東側のアンタルヤ近郊がゴール地点となっていて、通して歩くと約1か月かかる。しかし、歩くために取れる日数が10日から2週間程度という時間的制約がある人も多い。そのため、実際には、途中を飛ばしながら絶景や遺跡など見所の多い箇所だけを選んで歩くという人も目立つ。歩かずにとばした部分は、公共交通機関などで移動する。

図表5 キャンプしながら「リュキアの古道」を歩くトレッキング客



1960年代からのテケ半島海岸部における観光産業の発展は、ヨリュクの人々に対する定住化政策や幹線道路整備の結果であった。しかし、「リュキアの古道」では、その過程で使われなくなった道が、古代リュキアやローマ時代といったイスラーム化以前の遺跡やテケ半島の地形と地中海が生み出す

自然景観など既存の観光資源と結びつけられ、トレッキングルートとして新たな観光資源となった点で注目に値する。さらに、「リュキアの古道」を歩く人が増えるにつれ、ルート上の村や町において、このトレッキングルートを活用した観光まちづくりと呼べる活動が行われるようになってきている。次節では、デムレ (Demre) と周辺の村で行われている「リュキアの古道」を活用した地域振興策を事例に、遺産化と観光の相互作用を検討する。

デムレとその観光資源

本節で事例として取り上げるデムレは、「リュキアの古道」のトレッキングルートのなかでおおよそ中間地点に位置する地方都市である。背後にそびえるタウラス山地から流れる、古代にはミュロス川と呼ばれていたデムレ川による沖積作用で形成された平野に市街地がひろがっている。アンタルヤ県の中心都市アンタルヤからは、海岸沿いの幹線道路を使って公共交通機関で約2時間半のところにある。デムレは1968年に4つの村が合併される形で市となった。人口は2019年の統計では約2万6000人である (Demre Belediyesi, 2020)⁵。

古代にはこの地にミュラ (Myra) という都市国家が栄えていた。紀元前2世紀にはリュキアでも有力な都市であったという。テケ半島がリュキア属州としてローマ帝国の支配下になった後もこの地域の中心都市であり続けた (Wilson, 2014 : 89)。キリスト教化後の4世紀には、サンタクロースのモデルとされる聖ニコラスが司教を務めていたことでも知られていて、彼の死後、彼の墓を祀る聖ニコラス教会も建てられた。なお、11世紀に聖ニコラスの墓とされる石棺に納められていた遺骨が南イタリアのパーリに持ち去られている (Wilson, 2014 : 89)。

ビザンツ帝国が弱体化していくと、この地域のイスラーム化や戦乱によっ

⁵ 町の名称が1987年にトルコ語で城塞を意味する「カレ (Kale)」に変更されたが、2005年から再びデムレという名称が使われるようになった。

てミュラは衰退していった。特に、デムレ川が6世紀以降その流れを変えたことで、町に土砂が堆積するようになり、人口も減少していった。14世紀半ばには廃墟と化していたという。オスマン帝国時代には聖ニコラス教会も半ば崩壊し、この地域に暮らしていたギリシャ系キリスト教徒が建物の一部を礼拝堂として使うだけになっていた (Doğan et al., 2014 : 9 -12)。その後、19世紀半ばにはロシア皇帝ニコライ1世が聖ニコラス教会の建物を修復し、トルコ共和国の独立までこの地域に暮らしていたギリシャ系キリスト教徒たちによって教会として使用されていた (Doğan et al., 2014 : 9 -12)。現在は博物館として公開されている。

上述の通り、古代の都市ミュラは、堆積した土砂に埋もれており、その上に現代のデムレの市街地が形成されている。そのため、今日目にすることができる古代都市ミュラの遺構は、ローマ帝国時代に建てられた円形劇場と、その周辺に残る岩窟墓など、ごく一部に限られている (図表6)。これらは、史跡整備されて一般公開されている。同時に、デムレの中心部から約5キロ

図表6 ミュラ遺跡に残る岩窟墓



離れたところにあるミュラの外港の役割を果たしていたアンドリアケ (Andriake) と合わせて、アンタルヤのアクデニズ大学による2009年から発掘調査が続けられている。アンドリアケ遺跡は、ローマ皇帝ハドリアヌスの命によって建てられた倉庫が残っていることで知られる。なお、2012年から博物館とする目的でこの倉庫の修復工事が行われ、2016年にリュキア文明博物館 (*Likya Uygarlıkları Müzesi*) が開館し、一般公開されている。

一方、聖ニコラス教会は、聖ニコラスがロシア正教における重要な聖人とされていることもあり、多くのロシア人観光客が巡礼に訪れている (図表7)。また、聖ニコラスはデムレ市の市章にも使われている。ただし、東方正教会のイコンで表現される聖人としての姿ではなく、赤い帽子を被った所謂「サントクロース」の姿で表現されている (図表8)。

ここまで見てきたように、デムレ市中心部の観光資源は、ミュラ遺跡、聖ニコラス教会のほか、リュキア文明博物館の開館と併せて史跡整備が進んだアンドリアケ遺跡も挙げられる。これらに加え、デムレの西側に浮かぶケコ

図表7 聖ニコラスのものとする石棺に祈りを捧げるロシア人観光客



図表 8 聖ニコラス（サンタクロース？）をあしらったデムレ市の市章



ヴァ島周辺をめぐるボートツアーが重要な観光資源となっている。アンドリアケ遺跡のそばの港が、ケコヴァ島へのボートツアーの拠点となっており、春から夏にかけては毎日多くのボートツアーがケコヴァ島に向かっている。ケコヴァ島は、テケ半島でも有数のボートツアーのメッカである。アンドリアケの港からだけでなく、ケコヴァ島よりもさらに西側にあるカシュからも、シーズン中は連日多くのボートツアーが催行されている。

ケコヴァ島の対岸には、カレ (*Kaleköy*) とウチュアウズ (*Üçağız*) という二つの漁村がある。カレはスイメナ (*Simena*)、ウチュアウズはティムイッサ (*Teimuissa*) という古代の都市遺跡の上にある。この二つの都市とケコヴァ島のドルキステ (*Dolchiste*) は、2世紀頃に起こった大地震のため、都市の一部が海中に沈んだ。海水の透明度が高いこともあり、水没した建物の遺構は、今日でも海上から目に見ることができる。そのため、ケコヴァ島側に残っている海中に沈んだ都市の遺構の見学は、ケコヴァ島周辺の入り江での海水浴と並んで、ボートツアーの大きな目玉となっている (図表9)。

しかしながら、デムレを訪れる観光客の多くは、宿泊せずに通過してしまっているのが実情である。例えば、聖ニコラス教会を訪れるロシア人の団体観光客は、アンタルヤ周辺のリゾートホテルに宿泊することが多い。貸切バスでデムレに到着すると、聖ニコラス教会とミュラ遺跡を見学し、アンドリアケのヨットハーバーからケコヴァ島に向かうボートツアーに参加する。ポー

図表9 スイメナ遺跡の上に発展しているカレ村



ツアーで海水浴や海中に沈んだ遺跡の見学を楽しんだ後、バスで宿泊先に戻っていくのである。実際のところ、デムレ市中心部にはホテルも少なく、デムレを拠点に周辺を観光するのは難しい。

観光以外の産業に目を向けると、デムレ川に拓けた平野にひろがるデムレの主要な産業は農業である。デムレやその周辺の村々には、かつてはヨリュクとして移牧に従事していた人びとが多く定住しており、「昔は（親や祖父母が）ヨリュクだったよ。」と自己紹介してくれる人も多い。かつてのヨリュクの人びとの多くは、農業に従事している。また、上述のケコヴァのカレ村に暮らす人びとが該当するが、海岸沿いに定住したヨリュクたちのなかには、漁師となった人たちもいる。しかし、1980年代以降、観光開発が進むなかで、ボートツアーやホテル、レストランといった観光産業にも従事する人が増えていったという。

効率的な農業生産を可能にしたビニールハウス農業は、デムレでも盛んに行われている。地元出身者の話によると、デムレ周辺は、1970年代頃までは

図表10 デムレ周辺にひろがるビニールハウス農園



レモンやオレンジの果樹園が多く、「緑のデムレ (*Yeşil Demre*)」と呼ばれていたという。しかし、現在のデムレを高台から眺めると、デムレの中心部が白いビニールハウスの海に囲まれた離島のように見える状況となっている(図表10)。これは、ほとんどの果樹園がトマトやキュウリなどを栽培するビニールハウス農業に置き換えられていった結果である。

ここまで、デムレとその観光資源について概観した。次節では、「リュキアの古道」トレッキングルートが、デムレにおいてどのように活用されているか、「デムレーケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル (*Demre-Kekova Outdoor Yöresel Lezzetler Festivali*)」の事例からみていく。

「デムレーケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル」

デムレにおける「リュキアの古道」を活用した観光振興の取り組みは、デムレ近郊にあるカパクル (*Kapaklı*) 村から始まった。カパクル村は、デム

レ市中心部から車で15分ほどのところにあり、ウチュアウズに向かう道路沿いのカパクルと、より標高の高いホイランという二つの地区がある。2017年、CRSは、持続可能な観光開発を支援する「未来は観光にあり (*Gelecek Turizmde*)」⁶の助成金を得て、このカパクル村で「リュキアの古道で歴史を知る休憩 (*Likya Yolunda Bir Tarih Molası*)」と題した観光開発プロジェクトを実施した (Aktüel Arkeoloji, 2017)。このCRSのプロジェクトに、カパクル村に暮らし、アンドリアケ港のそばでキャンプ場を営むB.Y.氏、カパクル村のホイラン地区でゲストハウスを経営するS.H.氏が協力している⁷。

このプロジェクトで行われた活動は二つである。まず、カパクル村の女性による「カパクル女性協会 (*Kapaklı Kadınları Derneği*)」が設立され、村にはこの団体が経営する「リュキアの古道」を歩くトレッキング客向けの休憩所が設置された (図表11)。休憩所では、地元の女性たちによって作られた商品の販売や飲食の提供のほか、周辺の「リュキアの古道」トレッキングルートの見どころに冠する情報提供することが目的とされた。

もう一つは、リュキアの古道のルートにカパクル村を組み込むことである。この村のホイラン地区やその周辺には、ホイラン (Hoyran)、イストラダ (Istlada)、トリユサ (Trysa) のという古代リュキア時代からの未発掘の都市遺跡が点在している (図表12)。ただし、これらの遺跡は、もともとの「リュキアの古道」ルートからは少し外れていた。そこで新しくつくられたルートでは、カパクル村を通してこれらの遺跡を周れるようルートが修正され、「リュキアの古道」を歩くトレッキング客をカパクル村に誘導する意図

⁶ 「未来は観光にあり」助成金は、トルコ文化観光省、UNDP、トルコの主要な酒造会社であるアナドル・エフェス (*Anadolu Efes*) とのパートナーシップによって設立された、トルコ国内の持続可能な観光開発に関わる活動を支援する助成金制度である (Anadolu Efes, 2019)。

⁷ B.Y.氏、S.H.氏ともにデムレ出身であるが、高等教育はイスタンブルで受けたという。S.H.氏は2017年時点で50代の男性で留学経験もあり、エンジニアとしてイスタンブルで働いた後にデムレに戻った。現在は語学力を生かしつつホイラン地区でゲストハウスを営んでいる。一方、B.Y.氏は、2017年時点で30代半ばの男性である。イスタンブルで大学卒業後、働いた後に、デムレに戻ってキャンプ場経営を始め、カパクル村でもゲストハウスを営んでいる。また、CRSの運営委員も務めている。

図表11 カバクル地区に設置された休憩所



図表12 ホイランに残る古代リュキア時代の石棺



があった。

「未来は観光にあり」事業をきっかけに始まった持続可能な観光開発を継続していくための取り組みとして、2018年に始まったのがアウトドアと地域の食文化をテーマにしたアウトドア・フェスティバルである。これは、B.Y.氏がCRSの協力も得て実施したカパクル村を中心としたイベントであった。2019年には、「ダムレーケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル」(以下、アウトドア・フェスティバル)として、カパクル村、そしてケコヴァを中心にデムレ市全体で行われるイベントに発展した。

2019年のアウトドア・フェスティバルは、最終日がトルコ共和国建国記念日である10月29日に合わせる形で、10月下旬に4日間開催された。主要なイベントのスケジュールは、図表13に示したとおりである。デムレ周辺の「リュキアの古道」ルートを実際に歩いて、カパクル村やイストラダ遺跡、ビザンツ時代の教会や修道院跡などにでかけるイベントのほか、サイクルレースやカヌーレースでケコヴァまで向かうイベント、地元の食材を使った食事会などが企画・実施された。

開会式では、司会を務めたB.Y.氏が、アウトドア・フェスティバルはデムレにおいて持続可能な観光のあり方を紹介するための企画であると説明した。さらに、「リュキアの古道」をそうした観光のための資源として活用することで、デムレ周辺に点在する古代の遺跡や村に残るヨリユクの伝統文化を守ることの重要性を強調した。そのうえで、自分たちの遺産が何であるかを理解することで、デムレを訪れる人びとにそれを紹介できるようにすることがアウトドア・フェスティバルの趣旨だと話した。

一方、開会の挨拶に立ったデムレ市長は、デムレにおいてこうした文化イベントの機会がなかったことを指摘したうえで、デムレ周辺の遺跡やヨリユクの伝統文化に焦点を当てるアウトドア・フェスティバルが、観光振興やデムレ農産物の紹介の機会になると述べた。また、国際的な観光地として知られるケコヴァがデムレの一部であることが知られていないことが問題であり、アウトドア・フェスティバルを通して、ケコヴァがデムレの一部であること

図表13：2019年に行われた「ダムレ・ケコヴァ・アウトドアと食文化フェスティバル」スケジュール表（主な行事のみ掲載）

1日目（10月26日）		3日目（10月28日）	
時間帯	内容	時間帯	内容
午前	開会式（於ダムレ中心部広場）	終日	サイクルレース （ダムレ→フィニケ）
終日	サイクルレース （ダムレ→カバクル→ウチュアウズ）	終日	ケイト・クロウ氏と遺跡めぐりツアー
終日	「リュキアの古道」ウォーキング （ダムレ→カバクル→イストラダ遺跡）	夜	野外コンサート （於 ダムレ中心部広場）
夕方	夕食会 （於 カバクル村）		
2日目（10月27日）		4日目（10月29日）	
時間帯	内容	時間帯	内容
午前	ケコヴァ島へのカヌーレース	終日	自転車によるダムレ名所めぐり （聖ニコラス教会→ミュラ遺跡→リュキア文明博物館）
午後	「オフ・ロードショー」 （CRSの活動に関する動画上映会）	夕方	地元の食材による食事会 （於 ダムレ中心部広場）
夕方	野鳥写真コンテスト （於 リュキア文明博物館）	夜	共和国建国記念日式典 （於 ダムレ中心部広場）
夕方	アンドリアケの砂浜で夕陽を観る会	夜	野外コンサート （於 ダムレ中心部広場）
夜	野外コンサート （於 ダムレ中心部）		

図表14 デムレからカバクル村まで「リュキアの古道」を歩くイベント



をデムレ内外に知らしめることに意義があると強調していた。

開会式後、デムレからカパクル村までサイクルレースと、「リュキアの古道」を歩いてカパクル村に行き、そこからイストラダ遺跡に向かうウォーキングイベントが同時に行われた。筆者はウォーキングイベントに参加したが、参加していたのは老若男女40名で、外国人と思われるのは筆者だけで、大多数の参加者はデムレ市民であるようだった。ウォーキングイベントは、デムレの中心部からフェスティバル主催者が用意した貸切バスでアンドリアケの港に向かい、そこから海沿いの道を歩いていく形であった。ガイド役はいるが、基本的には道なりに歩けば目的地にたどり着けることもあるのか、歩くペースについての指示を出すだけであった。途中で休憩をはさみながら、カパクル村までの約7キロの道のりを歩いていった(図表14)。

2時間ほどで約7キロ離れたカパクル村に到着すると、自動車で移動した市長やB.Y.氏の出迎えを受けた。「カパクル女性協会」の運営する休憩所でお茶がふるまわれ、また、村では、村民たちによる畑や果樹園で採れた農作物を使った産品(オリーブの油漬、ジャム、乾燥ハーブなど)の販売のほか、昼食が提供(有料)されていた。先に到着していたサイクルレースの参加者や、ウォーキングイベントの参加者は、カパクル村の産品を実際に手に取ったり、村の料理を味わうことができるようになっていた。こうした形で休憩した後、希望者はリュキア時代の石棺や礼拝堂の跡が残るイストラダ遺跡までさらに歩いて往復し、カパクル村まで戻ってきたら、貸切バスでデムレ市中心部まで戻れるようなプログラムであった。

3日目には、アンタルヤからケイト・クロウ氏を招き、彼女とともにデムレ周辺の「リュキアの古道」ルート上のムスカル村(*Muskar*)⁸、「リュキアの古道」のルートからは外れているが、岩窟教会の跡が残るアラジャヒサル(*Alacahisar*)とシオン修道院跡を見て回るツアーが行われた(図表15)。

⁸ ムスカル村は、デムレから北にある山間に位置している。村にはビザンツの教会跡やリュキア時代の石棺のほか、村を見下ろすアサルテペ(*Asartepe*)と呼ばれる丘には古代リュキア時代からの城塞跡が残っている。

図表15 アラジャヒサルの岩窟教会跡



このイベントについては、目的地までの移動距離が長いことから、主催者が用意したミニバス3台を使つての移動となった。参加者は、約40名であった。デムレの人びとが中心であったが、CRSのメンバーやローカルガイドの他、リュキア文明博物館の設立を決まった当時に文化観光大臣を務めていたエルトゥールル・ギユナイ氏⁹も参加していた。訪れた遺跡を歩きながらケイト・クロウ氏がその歴史について説明していく形で、ツアーは進められた。また、ムスカル村では村長の出迎えを受け、参加者たちとムスカル村の観光のあり方について議論し合う場面もあった。

図表13のスケジュール表からもわかるように、これらのウォーキングツアーの他にも、アウトドア・フェスティバルでは、デムレの史跡をめぐるサイクルレースや、ケコヴァへ向かうカヌーツアーなど、体験的にデムレ周辺

⁹ エルトゥールル・ギユナイ氏は、2007年から2013年まで文化観光大臣を務め、2015年に国会議員を引退した。リュキア文明博物館の設立を決めたこともあり、デムレには彼の名前を冠した通りもある。出身はデムレではないが、デムレでは知名度の高い人物である。

の観光名所を周るイベントが中心であった。次節では、このような体験型のプログラムが「遺産化」の観点からどのように捉えることができるか、「リュキアの古道」を「歩く」ことの意味に焦点を当てて検討する。

「道を歩く」ことと遺産化

「リュキアの古道」のトレッキングは、古代の道やヨリユクたちがかつて家畜を移動させるのに使っていた道など、現在は使われなくなった道を実際に歩くことで、テケ半島の歴史、文化、そして自然を楽しむことが観光の魅力とされてきた。つまり、「道」を「歩く」ことがその核にある観光のあり方である。そうであるがゆえに、デムレで行われたアウトドアフェスティバルにおいても、「リュキアの古道」として設定された道を実際に歩くことが主要なイベントとなっていた。

「道」について研究してきた人類学者ペネローペ・ハーヴェイとハナ・ノックス、ディミトリス・ダラコグルーらは、移動に関わるインフラストラクチャーとしての道が、単に異なる場所を結び、人々やモノ、情報などの流れを生み出すだけでなく、その沿線地域にどのような社会的、物質的な影響を及ぼしているかを論じている (Harvey & Knox, 2015 ; Dalakoglou, 2017)。「リュキアの古道」トレッキングルートは、古代リュキア文化や地中海の「青い海」といったトルコ地中海地域に注がれてきた従来の観光のまなざしにトレッキングという新しい要素を結びつけた。このトレッキングルートとして設定された道は、既存の観光資源だけでなく、かつてのヨリユクの生活文化やこれまで観光客の目に触れなかった未発掘の遺跡を取り込み、テケ半島における新しい観光のかたちを生むことにつながっている。

一方、「歩くこと」については、ジョー・リー・ヴェルグンストは、転倒や道に迷うことといった歩行という実践の断絶から、周辺の環境の諸要素が歩行と相互に深く関わり合っていることを示した (Vergunst, 2016 [2008])。また、旅の途上という観点からスペインのサンティアゴ巡礼路を歩く人びと

を調査した土井清美は、巡礼者が歩きながら巡礼路周辺の環境と取り結ぶ連続的な関係を「ウォークスケープ」と呼んでいる（土井，2015）。土井は、「ウォークスケープ」概念を通して、巡礼者たちの中で常に差異をはらむものであるとする一方で、差異をはらみつつも彼らの経験が類似したものともなっていると論じている（土井，2015：295）。古川不可知は、これらの「道」や「歩行」に関する研究をふまえながら、流動的な環境の歩行者と道との関係性はそれらを含めた環境中の諸要素の相互作用のなかで立ち現れてくると指摘している（古川，2020）。これらの研究は、「遺産化」の過程におけるさまざまなパフォーマンスは、人間・非人間のアクター間の複雑な関係性のなかで、言説や表象とも絡み合いながら生み出されているという近年の遺産研究の指摘にも重なってくる。

アウトドア・フェスティバルにおいて、デムレの人びとが「リュキアの古道」を歩くことは、山間部に打ち捨てられた古代リュキアの都市遺跡やビザンツ時代の教会、修道院の廃墟に接する機会となる。また、デムレやその周辺の村々に暮らす人びとの多くにとって、移牧はすでに過去のものとなっている。そのような彼らにとって、自分たちの親世代や祖父母世代にあたるかつてのヨリユクたちが歩いていた道を一部とはいえ歩くことは、その道を通して過去のヨリユクたちが周辺環境（古代リュキアの都市遺跡や石棺、ビザンツ時代の教会や修道院の廃墟など）と取り結んでいた「ウォークスケープ」を共有することにもつながる。

ただし、アウトドア・フェスティバルに参加したデムレの人びとは、現在ではあまり人が歩かなくなった道をただ歩いているわけではないということにも留意すべきである。彼らの歩行は、古代リュキアやヨリユクの伝統的生業といった「遺産」を意識するようにあらかじめ方向づけられたものだからである。彼らが歩く道には、テケ半島の歴史、ヨリユクの伝統文化、自然に触れるといった「リュキアの古道」としての意味が最初から付与されているのだ。つまり、「リュキアの古道」を歩くことは、かつてのヨリユクたちの「ウォークスケープ」を共有することを通して、そのルート上にある見どころ

るとされる遺跡や廃墟を含めた周辺的环境を「遺産」として再認識することにつながっている。

おわりに

本稿では、トルコ地中海地方で近年注目される観光のあり方である「リュキアの古道」トレッキングルートに焦点をあて、歩くことがいかに「遺産化」の過程に関わっているかを検討した。1960年代からのテケ半島海岸部における観光産業の発展は、ヨリユクの人びとに対する定住化政策や幹線道路整備といった社会変容の結果である。「リュキアの古道」の設定によって、この地域の社会変容の過程で放置された山間部の廃れた道は、この地域ですでに観光資源化されていた古代リュキアの文化遺産や自然景観と結びつけられ、トレッキングルートとして新たな観光資源となった。加えて、山間部や地中海沿岸の村や町に残るヨリユクたちの食文化や生活にも焦点があたったことでこの地域のヨリユクの生活文化が見直され、観光資源化される契機になった。本稿では「リュキアの古道」を活用したイベントであるデムレのアウトドア・フェスティバルを事例に、こうした「遺産化」の過程において、「リュキアの古道」とされた道を歩くこと自体が、かつてのヨリユクたちの「ウォークスケープ」を現代の人びとが共有することにつながり、これらの「遺産」を意識する機会となっていることを示した。

しかし、本稿で扱った「遺産」とは、厳密には、アウトドア・フェスティバルに参加したデムレの人びとにとっての「遺産」である。「歩くこと」に関する先行研究では、道を歩く人が道を介して周辺環境と取り結ぶ関係性は差異をはらみつつ共有されるものとして理解されている(古川, 2020: 53)。「リュキアの古道」を通じた「遺産」の価値の方向付けは、デムレの人びと、外国人観光客やデムレを訪れるトルコ人観光客それぞれにとっての歩く経験に一定の共通性を与える。その一方で、どんな対象に、誰が、誰にとってのどのような「遺産」の価値を持つかということは、常に差異をはらんでいる。

実際、この遺産の価値の齟齬をめぐる問題は「遺産化」の議論のなかで常に議論されてきたポイントでもある。

ただし、「リュキアの古道」を歩くことを通じて、どのような「遺産」の価値が意識されているのかについては、さらなる調査と考察を要する。特に、どのような対象が「遺産」となるのか（みなされるのか）という点の検討も重要である。本稿では触れることができなかったが、「リュキアの古道」のルート上にもつかる廃墟は、古代リュキアの都市遺跡やビザンツ時代の教会や修道院の跡だけではない。デムレ周辺の村々では、過疎化もすすんでおり、放置された家屋の廃墟なども点在しているが、こうした廃墟は、「リュキアの古道」トレッキング観光の紹介のなかではまず取り上げられることはない。何が「遺産」として取り上げられ、何が切り捨てられるのか、そこにどのような「遺産」価値の揺らぎがあるのかを検証していくことを、今後の課題としたい。

謝辞

本稿の内容の一部は、JSPS 科研費18K11888の助成による研究をもとにしています。また、現地での調査は2019年度福岡女学院大学長期研修制度を利用して実施しました。

参考文献

- Adalet, B. 2018 *Hotels and Highways: The Construction of Modernization Theory in Cold War Turkey*. Stanford: Stanford University Press.
- Bingham, A. K. 2013 *Ayşe's Trail*. United Kingdom: Mudhouse Publishing.
- Clow, K. 2014 *The Lycian Way: Turkey's First Long-Distance Walk [4th Edition]*. Antalya: Upcountry Ltd.
- Culture Routes Society 2019 Lycian Way. <https://cultureroutesinturkey.com/the-lycian-way/> (2020年12月26日閲覧)
- Dalakoglou, D. 2017 *The Road: An Ethnography of (Im)mobility, Space, and Cross-Border Infrastructures in the Balkans*. Manchester: Manchester University Press.

「リュキアの古道」トレッキング観光を通じた遺産化
—トルコ地中海地方デムレにおける「デムレ・ケコヴァ・アウトドアと地元の食文化フェスティバル」の事例から— (田中)

Demre Belediyesi 2020 Demre Belediyesi 2019 Faaliyet Raporu.

<https://www.demre.bel.tr/faaliyet-raporlari> (2020年12月28日閲覧)

Doğan, S., Çorağan, N., Burgurlu, N., Alas, Ç., & Apaydın, E. 2014 *Demre-Myra Aziz Nikolaos Kilisesi*. İstanbul: Arkeoloji ve Sanat Yayınları.

土井 清美 2015年 『途上と目的地：スペイン・サンティアゴ徒歩巡礼路旅の民族誌』 (春風社)

古川 不可知 2020年 『「シェルパ」と道の人類学』 (亜紀書房)

Haldrup, M. & Bærenholdt, J. O. 2015 Heritage as Performance In E. Waterton. & S. Watson. (eds) *The Palgrave Handbook of Contemporary Heritage Research*. New York: Palgrave Macmillan, pp.52-68.

Harrison, R. 2013 *Heritage: Critical Approaches*. London: Routledge.

Harvey, P., and Knox, H. 2015 *Roads: An Anthropology of Infrastructure and Expertise*. Ithaca and London: Cornell University Press.

橋本 和也 2018年 『地域文化観光論：新たな観光学への展望』 (ナカニシヤ出版)

木村 至聖 2020年 「〈遺産化〉とは：遺産研究と社会的アプローチ」 木村至聖・森久聡 (編) 2020年 『社会学で読み解く文化遺産：新しい研究の視点とフィールド』 (新曜社) 3-10頁

木村 至聖 2020年 「消費の欲望：文化遺産はどのように商品となるのか」 木村至聖・森久聡 (編) 2020年 『社会学で読み解く文化遺産：新しい研究の視点とフィールド』 (新曜社) 60-65頁

木村 至聖・森久聡 (編) 2020年 『社会学で読み解く文化遺産：新しい研究の視点とフィールド』 (新曜社)

松原 正毅 2004年 [1998年] 『遊牧の世界：トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』 (平凡社)

Kirshenblatt-Gimblett, B. 1998 *Destination Culture: Tourism, Museums, and Heritage*. Berkeley: University of California Press.

Smith, L. 2006 *Uses of Heritage*. London and New York: Routledge.

谷 泰 1996年 [1976年] 『牧夫フランチェスコの一日：イタリア中部山村生活誌』 (平凡社)

T.C. Kültür ve Turizm Bakanlığı 2020 2020 PATARA YILI. *Türkiye Kültür Portalı*.

<https://www.kulturportali.gov.tr/portal/2020-patara-yili> (2020年12月26日閲覧)

Tüzün, M. 2019 *Likya Yolu Rehberi Likya Yolu Hakkında Aradığımız Herşey Yürüyüş Parkurları ve Haritalar* [2. Baskı]. Ankara: Elpis Yayınları.

Urry, J. & Larsen, S. 2011 [1990] *The Tourist Gaze 3.0*. Los Angeles and London: Sage.

Walsh, K. 1992 *The Representation of the Past: Museums and Heritage in the Post-Modern*

- World*. London: Routledge.
- Vergunst, J. L. 2016 [2008] Taking a Trip and Taking Care in Everyday Life. In T. Ingold & J. L. Vergunst (eds) *Ways of Walking: Ethnography and Practice on Foot*. London and New York: Routledge, pp.105-121.
- Wilson, M. 2014 *Biblical Turkey: A Guide to the Jewish and Christian Sites of Asia Minor*. İstanbul: Ege Yayınları.